

○ 平 岩 學 洋
世を侘びて山に骸を潜めつゝ歌の世夢む人は瘦せたり

○ 中 西 斐 蔭
變り行く雲の形を眺めてはうつし此世を泣く夕べかな

○ 尾 上 政 子
朝窓に近うも匂ふ白蓮の露美しくしき鐘の響や

○ 眞 未
夏瀆の夕べ眞砂路さまよへば波涼しうも月さし昇る

○ 田 邊 孝
夕雲や初夏かざる野の錯と花なき里を寒う流るゝ
菩提樹に斧をかざせば山鳥のぼろく啼きぬ朝明の森

○ 林 靜 子
物思ひ窓の月に寄る夏夕べ音なくちりぬ紅のけし
瘦せし頬に笑みをつくりて慰めん母君もなし啼く子規

○ 伊 藤 天 郎
暗の夜を神が呪ひの聲のごと身に泌み渡る水のせいらぎ
讀みさし、伊勢を枕に畫むせば又好き夢の胸にも入らなむ

○ 順 禮 子
順禮に身の上話しきく夜なり怪しう更けぬ山子規
花ならば白あざみこそよからむと夕野逍遙ふ我頼は瘦せぬ

○ 中 村 鶴 聲
塵の世をかこつ子茲に來たらすや胸さながらに清し白瀧

○ 中 村 鶴 聲

うすもの、秋にふれてそと搖るゝ、白首昏くしき匂ひにこめたる。
* * * * *
うらぶれて小島に舟す繪師と我が浮世語りに日はくれにけり
灯とりて大星小星したゝかに酔ひもしぬらむ七夕の宵
* * * * *

無聊吟社句集

水底の苔まで見ゆる清水かな
枝蛙夕吹く風の雨近き
松風の余りをそよぐ青田かな
藻の花や明日咲く花は水の底
今人の呑だ跡あり苔清水
飛で来て袖に隠るゝ壁かな
山伏の山を下るや蚊喰鳥
花桐や茶畑つゞき寺の裏
活花は遠州流や夏座敷
蚤も居ぬ絹の蒲團や京旅宿
掛香や老いたる妻の憂き思ひ
よき水を得て歸りけり百合の花
朝風や君を見送る夏衣
小さき手に持ちきれぬ程の覆盆子かな
兩岸の芽の茂りや行々子

天 外
同 久
文 久
同 子
同 岳
泉 岳
同 水
愛 水
同 村
耕 村
同 月
醉 月

